

陶淵明の「虚」と「実」
——岡村繁氏の「淵明観」をめぐって——

丁 国 旗

Summary

The Interpreted Tao Yuanming ——Focus on Okamura Shigeru's Tao Yuanming——

DING Guoqi

Tao Yuanming (365–427) is well known as a poet who remains aloof from others. For Chinese and Japanese, though he is a poet who is easy to be intimate with, he is still full of mysteries and various interpretations thus have been made on him. The purpose of my paper is to discuss the interpretation on Tao Yuanming by a famous Sinologist Okamura Shigeru. Okamura has made a negative valuation on Tao Yuanming and according to Okamura's opinion, Tao is not a detached poet from worldly matters as one usually sees, on the contrary, he is a common character who concerns about the worldly reality. On the basis of the arguments of the famous Sinologists like Shiba Rokuro, Yoshikawa Kojiro, Ikkai Tomoyoshi and so on, I will make an examination of Okamura's binary structure in his view and try to search for the sophisticated inner world of Tao Yuanming through the analysis of Tao Yuanming's concrete works.

はじめに

気韻の高きこと古今第一と称せられる詩人陶淵明は中国人にはもとより日本人にも永く親しまれてきた。しかし、陶淵明その人物についても、思想についても、詩文についても、たくさんの謎があつて、とらえ難いと言われてきた。日本の中国古典の詩論・詩文に関する研究の泰斗である鈴木虎雄博士は、「淵明が集、余童年より愛誦して白髪短髥の今に至る、而して未だ正解を得る能はず」¹⁾と述べている。もう一人、淵明研究の大家として知られている一海知義氏も「陶淵明とは比較的長い年月付き合ってきたにもかかわらず、私はこの複雑な詩人の全体像が、まだよくわかっていない」²⁾といった。

以上の言葉はいうまでもなく両氏の学問に対する謙虚な態度から発せられたものであるけれども、淵明その人と作品は奥深く、捉えにくいということも事実であろう。考えてみれば、淵明に関する記述が簡略過ぎることはひとつの原因であろうが、過酷な政治環境にあつて、淵明が、自分の真の意図を隠したり、寓意の手法を用いたりして、自らの真実をはぐらかしてしか語らぬ、といったことが、いっそう難解さを増したのではないかと思う。

「ハムレットは一人しかいないが、百人百様の見方がある」——この俗語の言うように、陶淵明についてもまさに同様のことが言えるのではないかと思う。陶淵明の実像（陶淵明本来の姿）と陶淵明の虚像（解釈された陶淵明）とは厳然とした二つの違った歴史的な存在だと思う。それは端的に淵明の奥深さを物語っているのではないかと思う。奥行きが深いからこそ、さまざまに解釈されてきたのであろう。

要するに、陶淵明の真実を解明するには、従来の淵明研究家の淵明認識をふまえながらも、そういう人たちの意図的、または無意識的な主観的解釈のずれを是正しなければならないと思う。

本稿は今までの中国における淵明観の変遷を辿りながら、日本の淵明研究家斯波六郎、吉川幸次郎、一海知義、とりわけ岡村繁氏の淵明観（『岡村繁全集』はすでに中国語に訳出された）に重点をおいて、淵明がいかに解釈されてきたかについて、論述していきたいと思う。

1 中国における淵明観の考察

陶淵明の伝記は、宋の隠逸伝をはじめとして、晋書の隠逸伝、南史の隠逸伝など、彼の死後百年または二百年にして編集された史書に見える。また蕭統の陶淵明の伝、および陶淵明集の序は淵明の文学を評価する文字として、最も早いものの一つである。昭明太子の編纂した『文選』と梁代の鐘嶸が著わした『詩品』を見て窺われるように、淵明は無欲恬淡で、高潔な隠者として高く評価されたが、詩人としては必ずしも最高級の評価を得られなかったらしい。そして、六朝につづく唐代もまた、原則的にはこうした評価を継承するものであった。

宋の時代は淵明への敬慕の情を飛躍的に拡大させ、後世の淵明像を揺るぎなく確立した画期

的な時代であった。

蘇軾に淵明の詩を評した有名な言葉がある――

「吾れ詩人に於て甚だ好む所なし、独り淵明の詩を好む。淵明、詩を作ること多からず、然れどもその詩は質にして実は綺、癭せていて実は腴。曹(植)、劉(楨)、鮑(照)、謝(朓)、李(白)、杜(甫)の諸人、みな及ばざるなり。」(『東坡続集』卷三)

「淵明の詩を、人は皆な是れ平淡なりと説くも、某の看るところに拠れば他は自ずと豪放なり。但だ豪放なり得来たりして覚えざる耳。其の本相を露出するものは、是れ荆軻を詠ぜる一篇なり。平淡底の人、如何んぞ這の様の言語を説き得て出だし来たらん」(『朱子語類』卷一四〇)

中国の詩人における陶淵明の地位が宋以後ますます高まったという事実と、大文豪蘇東坡と理学家の朱熹の称揚・喧伝とは、切り離すことのできないものである。

「平淡」「閑適」の説

「淵明の詩を、人は皆な是れ平淡なりと説く」(『朱子語類』卷一四〇)と、清の陳祚明の「千秋、陶詩をもって閑適となす」(『採菽堂古詩選』卷一三)とは、宋元以降、そうした淵明観が一般的になったことをかなり明確に裏付ける言葉である。

従って、もう一つの淵明観――晋朝への節義に生きる「忠臣」(沈約『宋書・隱逸伝』)としての厳しい淵明は、多くの人々にとって、ついに副次的な淵明像でしかなかった。³⁾

近代に入って、従来の伝統的な淵明評価に挑戦する画期的な提言を発したのは、魯迅(1881-1936)であった。一九二七年から、左翼文学運動の盟主魯迅と梁実秋、朱光潜らの「自由主義」知識人との間に左翼文学運動の是非についての論争が繰り返されていた。彼らの文学観にはもともと相容れない要因があり、それが左翼文学運動の是非をめぐる頂点に達していたと考えられるのである。

次の『魏晋の風度および文章と薬および酒との関係』と題する魯迅の講演もその論争のテーマの一つに関係がある。現実と歴史との緊密なつながりを想起すると、これは実に意味深いことである。

「私の考えによれば、たとえ昔の人でも、その詩文が完全に政治を超越した、いわゆる「田園詩人」「山林詩人」はいないものです。完全に人間世界から超越した者も、いないものです。すっかり世間から超越したら、もちろん詩や文章さえ書かないはずで。詩や文章もやはり人間社会の営みであって、詩があるからには世事に対して未練が残っていた証拠であります……

これによって、淵明は、俗世間を全く超越することができず、そればかりか、政治にもやはり留意していたし、また「死」を忘れることも出来なかったことがわかるのでありまして、これは彼の詩文の中に時々持ち出していることなのです。別個の見方を持って研究したならば、おそらくは旧来の説とは違った人物に仕上げることも出来るでしょう。」(『而已集』所収)

魯迅は、一九三五年に、『隱士』と『題未定』草』第六・第七の三篇の随筆(いずれも「且

介亭雜文二集」所収)を發表して、さらに注目を集めた。

魯迅は上述の隨筆の中でこのように述べている。

「……後世の人々は、陶淵明といえば飄逸な人物だと頭から決めてかかるようになってしまった。しかし実際において、詩にしても、……「悠然として南山を見る」のほかに「精衛微木を銜んで、將に以て滄海を填めんとす。刑天 干戚を舞わし、猛志固より常に在り。」といった、憤怒の形相すさまじい(「金剛怒目」)詩もあるのであって、陶淵明が決して終日終夜飄々然としていたわけではないことを証明している。この「猛志固より常に在る」人と、「悠然として南山を見る」人とは、同一の人間のはずである。もしこのどちらかを捨ててどちらかを取るとすれば、完全な人間ではなくなる。どちらかを抑えてどちらかを揚げるとすれば真実から離れてしまうのである。今日でも、往々にして陶淵明を「静謐」などといってあがめ奉る人があるが、それは陶淵明が選文家や摘句家によって縮小され、凌遲の刑に処せられたためにほかならぬ。全身これ静謐でなかったからこそ、陶淵明は偉大なのである。……」⁴⁾

一九五三年、李長之氏が魯迅の淵明觀から示唆を受けて、注目すべき力作『陶淵明伝論』を世に出した。

以上見てきたように、中国の従来 of 淵明觀を基本的には次の二つに大別することができる。すなわち、「忠臣」の説(儒家)と「隱士」の説(道家)である。右の「金剛怒目」の説(魯迅)と「渾身静穆」の説(朱光潜)⁵⁾は、突き詰めて言えば、その延長線上にあると言ってよいだろう。

2 日本における淵明觀の考察

2-1 日本の代表的淵明研究者の淵明のとらえ方

2-1-1 斯波六郎——孤独

一九五〇年代の前半、斯波六郎氏が、その『陶淵明詩訳注』において、孤独な自己をいとおしむ淵明を語った(一九五一年、東門書房刊)⁶⁾。その後、『中国文学における孤独感』という著書で、その説をさらに、押し広めた。

「淵明の詩は殆ど皆そういう孤独なる生活からにじみ出たものであるともいえるが、その孤独感の見られる作品は、主として、社会と調和できないがために湧いた孤独感を湛えたものと、主として、人生のはかなさを嘆くがために湧いた孤独感を湛えたものと、二つに分けて見ることができる。」⁷⁾

2-1-2 吉川幸次郎——矛盾誠実

吉川幸次郎氏が、その『陶淵明伝』において、矛盾と苦悩を味わいつつも人間としての誠実に生きる淵明を説いた(一九五五年、新潮社刊)⁸⁾。

「園田の居に帰りて」その四

「人生は幻化に似て、終には当に空無に帰すべきぞ」

「雑詩十二首」第二首

「日月は人を捨てて去り、志あるも驍ばすを獲ず、此を念えば悲しく愴む懷あり、暁に終るまで静かなる能わず」

「雑詩十二首」第三首

「日と月は環り周ること有るも、我れ去りては再び陽きず、眷眷と往き昔し時をしのび、此を憶いて人の腸を断つ」

これらの詩について吉川氏は次の見解を述べた。

「それは達観の語であるよりも、悲傷の語であるごとくひびく。田園に帰った淵明の心は、死灰のごとくではあり得なかったものであり、むしろ波立ちやすい心でもあったのである。」⁹⁾

また、

「飲酒二十首」の第四首

「栖栖として群に失れし鳥の、日暮れて猶お独り飛ぶ、徘徊いて定まれる止りも無く、夜な夜な声は転よいよ悲しむ……」

「秋の菊には 佳しき色有り、露に衰れしままに その英を掇み、此の憂いを忘るる物に泛べて、我が世を遺てし情を遠む」

氏は、これらの詩について、次のように語った。

「淵明の生涯が、その詩の表面にたたえられた平静さにも似ず、苦悩に富んだものであったことを、この詩もまた示すが如くである」。¹⁰⁾

「日没してすべての物音がたえてのち、独酌の盃を手にしつつ、林にいそぐ鳥の声に耳をかたむける淵明の姿には、やはり何か沈痛なものが感ぜられる。酒に名づけて、「憂いを忘るる物」というのは、たちきりがたい憂いがあるからでないか。「我が世を遺てし情を遠む」というのは、世を遺てかねているのでないか」。¹¹⁾

氏が淵明に対する評価は、次の一節から窺われる。

「しかしこの矛盾の中にこそ、淵明の文学の高貴さがあるのではないか。哲学による達観、それも淵明にとっては真実であった。それとともに、哲学などによっては払いのけられない不安、それも淵明にとって真実であった。両者は矛盾といえは矛盾であるが、その矛盾を矛盾のままに表白しているのが、淵明の文学なのではないか」。¹²⁾

2-1-3 一海知義——虚構

一海知義氏は「虚構」を切り口として淵明をとらえた。

「虚構」の役割について、氏は次のように語った。

「その一つは、理想社会あるいは架空の状況の現出による、現実批判・現実諷刺であり、今一つは、分裂した自己(あるいは人間一般)の提示、または客観化による、統一への模索である」。¹³⁾

さらに、「虚構」の「内的要因」と「外的要因」について、次のように説明した。

「内的要因」

「矛盾分裂する自己に判定を下す第三の自己が時に必要となった。そのためには、自己を客

観化すること、あるいは現在の状況とは別の世界を仮設し、そこにおのれをつきはなして眺めてみる、といった作業も必要である」。¹⁴⁾

「外的要因」

「淵明の現実批判や自己主張に対して、常に一定の慎重さを強要してきた当時の政治、そして社会の状況と、深く関係するように思われる。」¹⁵⁾

「淵明が、強烈な自己主張、あるいは真率な自己表白、さらにはきびしい現実批判をとくに「虚構」という形で表出せざるを得なかった外的要因は、ここにある。それは淵明の詩が、きわめて多くの隠喩や寓意に満ちていることも、関係する。

それらは、一種の韜晦である。しかしそれは、諦観を求めるための韜晦ではなく、主張を裏にふくんだ韜晦であった。」¹⁶⁾

2-1-4 岡村氏の淵明のとらえ方——世俗と超俗

岡村繁氏は、「無批判で臆病な」¹⁷⁾「従来の淵明研究の一般的動向に対して不満を持ち」¹⁸⁾、『陶淵明——世俗と超俗』を著して、淵明を「超俗」だとする伝統的解釈を覆して、偶像破壊を図ろうとしたのである。これに関して、詳しいことは次の節に譲りたい。

2-2 右の諸氏の共通認識——淵明の「矛盾性」

斯波六郎

淵明が標榜した「固窮」について、斯波氏は吉川幸次郎氏の『陶淵明伝』での「^{わび}窮しさを固くまもらんとこころざしの節」という訓訳を採択して、淵明の矛盾を説きながら、自分の「孤独」説を展開した。

「淵明は、その「固窮の節」をいだいて、何ら心の動揺もなく、枯木死灰の如く平然として、窮乏に堪えつづけたのであろうか。

もし彼が、果たして枯木死灰の如く平然として過すことが出来たならば、恐らく「固窮の節」を歌った詩そのものすら、生まれなかったであろう。しかるに、事実、しばしば「固窮の節」を守る自己を歌わざるを得なかったことは、そういう信念をもって餓えと凍えとに打ち克ってゆかねばならぬ、自己の姿をかえりみて、そこに言い知れぬ寂しさを感じたがためである。」¹⁹⁾

「およそ、人がある高い心境に達するということは、まったく俗界と絶縁して、天上界の人となってしまうということではなくて、俗界にありながら天人の呼吸をすることである。……寂しさは寂しさとして、悩みは悩みとして、味わいつづけながら、またそれを超越して、自己の苦悩そのものまでも、おおらかに諦観する境地に、達したまでである。だから、その境地に達したと思われる後にも、やはり寂しさや悩みを歌った詩を詠んでいても、それは決して矛盾でもなく、撞着でもない。もし寂しさもなく、悩みもなくなってしまうと、そこにはもはや諦観も成り立たねば、悟覚もあり得ないであろう。」²⁰⁾

吉川幸次郎

「一見のんきそうに見える彼（淵明）の一生は、実は苦悩に満ちた面をもったのではないか。彼は、隠遁者であり、そのかぎりでは現実から逃避した人物であった。しかし体は現実から逃避しても、目は常に現実を熟視せざるを得なかったのではないか。現実に対するいたいたしい醒覚があったのではないか。」^[21]

「人間はもとよりさまざまな矛盾をもつ。矛盾の数々を、矛盾のままに語ること、それは誠実な文学にして、はじめて可能なことである。

淵明はそうした詩人であった。彼は田園に生を楽しむ隠遁者であった。しかし政治に対する関心を断ち切ることはなかった。」^[22]

一海知義

「古えより皆没するあり、これを念えば中心は焦がる」（『己酉の歳、九月九日』）
「日月は人を捨てて去り、志あるも騁ばすを獲ず、此れを念えば悲凄を懷き、暁に終るまで静かなる能わず」（『雑詩十二首』第二首）

氏は、こういった淵明の詩を挙げて、次のように述べた。

「淵明は人生の後半を隠遁者として送りながら、隠遁生活には徹しきれぬ覚醒感を抱きつづけた。「帰去来の辞」が示す大らかな達観と、「閑居しつつも蕩る志を執え」かねた（「雑詩」第十首）動揺とは、はげしく矛盾する。」^[23]

そのほか、淵明の『挽歌詩』と『自祭文』を挙げて、淵明の矛盾を力説した。

一海氏の見解を要約すれば次のようになる。

まず、『挽歌詩』は、その第一首の冒頭、「生有れば必ず死有り、早く終うるも命の促まれるに非ず」という「達観の言葉をもって、はじまっている」が、「その達観は、一本調子に全篇を貫かない。詩がうたいつがれるに従って、悲哀をさそう表現へと、下降してゆく」^[24]。

また、『自祭文』も、その末尾に至って、それまでの達観を示す表現とは矛盾した言葉を吐く。すなわち第三段落で、「天を楽しみ分に委ね、以て百年に至る」といい、第五段落では、「余 今斯に化するも、以て恨み無かる可し」という達観めいた意見を述べながら、

それらとは矛盾する言葉を、最後に提示することになる。

「人生は実に難し、死は之を如何せん、嗚呼 哀し哉」

淵明にとって、これも正直で素直な告白だったにちがいない。

「達観と動揺、閑静と猛志、小世界への安住と大きな世界への意欲、死への醒覚と生への執着、淵明はこれらの矛盾と誠実に対決した。そして、そのときどきの自己を誠実に表白した。」^[25]

「私は淵明を「超俗の詩人」というよりも、「反俗の詩人」と呼ぶべきだと思う。しかし淵明の作品を読んでいると、胸の洗われるような「超俗」的詩句に出会うことがしばしばあり、「超俗」の詩人と呼ぶことも、あながち否定し去るわけにはいかない。」^[26]

岡村繁

淵明の矛盾について、岡村氏の説を見てみよう。

「淵明の詩文は、素朴ですがすがしく、読む人の心を打つものが多い。そしてそうした彼の清澄な詩文を読むにつけて、われわれは、かかる詩文をものした作者の姿を想像し、その美しい理想像に自分のあこがれを託そうとしたいものである。だが、淵明そのものの実態は、必ずしもそれほど美しいものではなかったように思われる」。²⁷⁾

「とにかく、淵明は、その生涯にわたって、いちおう世俗的な栄達から遠ざかり、恬淡無欲な孤高の精神を貫き通したように見えながら、その実は、かなり気ままで自己中心主義的な生き方をするとともに、世俗性も意外に強い人物であったように見受けられる」。²⁸⁾

岡村氏の「淵明観」について、次の章で詳しく論じるので、それを見ていただきたい。

以上、考察してきたように、諸氏は切り口が違うにせよ、みな淵明の矛盾に注目して、淵明をとらえようとした。岡村繁氏を除いた他の諸氏は、淵明の矛盾を意識しながらも、淵明をマイナスに評価しないばかりか、むしろプラスに評価している。

3 岡村繁の淵明観とその根拠

3-1 岡村繁氏の淵明観

陶淵明について、岡村氏は次のような比喩表現を使ってその見方を表明した。

「こうこうと夜空に浮かぶ美しい月は、かつて天女の舞う夢幻的な神仙の世界であり、白兎が餅をつく楽しい童話の世界であった。なのに、実は、それは、およそかかる詩の世界とは正反対な、岩と砂ばかりの無味乾燥な死の世界であることがわかった。これは、われわれにとって大きな幻滅であった」。²⁹⁾

これを読んでいると、岡村氏の淵明に対する幻滅感がうんと伝わってくる。

さらに、次のような、もっと驚くべき発言がある。

「淵明の詩文の奥底にとぐろを巻く、なにか人間の魔性とでもいえるような、伶俐さ・わがままさ・功利さ・偽瞞性といったものが私にはある程度鮮明に感じ取られるからであり、それをどうにも払拭しきれないでいる」。³⁰⁾

「極端な二面性——歓喜と悲嘆、満足と苦悶、矜持と卑屈、達観と動揺、恬淡と迷執、超俗と卑俗、これらを改めて見なおした時、私は隠者としての淵明が包蔵する極めて複雑多様な性格に今さらながら驚かされるとともに、その奥底にある真意を量りかねて、気味の悪いような一種の戦慄さえ覚える」。³¹⁾

3-2 否定評価につながるプロセス

3-2-1 淵明の生涯における三つの段階

詳しいことは、岡村氏の著述を参照していただくことにして、淵明の生涯における三つの段階の区切り目において、岡村氏の「淵明観」を裏づけることを一つずつ取り上げて考察を加え

たい。

①東西遊官

筆者は、陶淵明の仕官時代について、氏を含めた六人の淵明研究者の「陶淵明年譜」をもとにして、次の表を作成した。

研究者 \ 仕官経歴	江州祭酒	江州主簿に就かず	劉牢之に仕える	桓玄に仕える	劉裕に仕える	劉敬宣に仕える	彭沢の令になる
李長之	○	○	○	○	×	○	○
岡村繁	○	○	○	○	×	○	○
吉川幸次郎	○	○	○	×	×	○	○
和田武司	○	○	×	○	○	○	○
沼口勝	○	○	×	○	○	○	○
田部井文雄	○	○	×	○	○	○	○

岡村氏の「陶淵明年譜」では、淵明の仕官生活を次のようにもとめている。

29歳、江州の祭酒となって、まもなく辞任。その後、江州の主簿として、召されたが、仕えなかった。そして、35歳、北府の長官、鎮軍將軍劉牢之の参軍として、京口へ赴任。36歳の時に、郷里に帰る。その次、37歳、桓玄の幕下に入った。実母の孟氏死去。以後三年間喪に服する。40歳、建威將軍・江州刺史劉敬宣の参軍となった。41歳、彭沢県令となり、まもなく辞任。

淵明のこの間の仕官生活について、岡村氏は極めて否定的な態度をとっている。そのうち、淵明が劉牢之のところを辞めた後、桓玄に仕えたことに対しては、特に厳しいまなざしを向けている。岡村氏は、沈約『宋書』隱逸伝の中の「弱年のころは薄き官にして、去就の迹を潔くせず」を引用して淵明の仕官態度を激しく非難した。岡村氏のこれに関する言論のいくつかを見てみよう。

「淵明は、帰郷後ほんのわずかの間に、選りにも選ってこの桓玄という、旧君の劉牢之に特に深い怨恨をいただき、かつ東晋王朝を転覆させようとする不逞な野望がもはや歴然とした人物のもとに走り、その幕僚として、はやばやと転身してしまったのであった。」³²⁾

「淵明に見られるように無節操で無原則な再三にわたる転身ぶりは、当時においてもやはり際立って目につく露骨でいやらしい行動であった。」³³⁾

「要するに、淵明の三十歳前から四十歳過ぎに至る仕官時代の生き方は当時であっても稀有なほど無節操であり、かつ功利的であった。」³⁴⁾

しかし、岡村氏の説について、私は、次の幾つかの疑問を持っている。

その一、表の「陶淵明年譜」見ても分かるように、三人の学者が淵明が劉牢之に仕えなかったという異見を持している。

その二、劉敬宣はなぜ父親の劉牢之を裏切った淵明に対して何も憤慨を感じないのか。それどころか、むしろ淵明を厚遇している。

その三、この表を見ていると、もっと驚くべきことを発見した。それは、三人の学者も淵明が桓玄と劉裕（二人とも晋朝の反逆者）に仕えたと主張している。もちろん、これで淵明が絶

対仕えたと断言できないが、しかし、否定も到底し難いだろう。

私の考えでは、たとえ、淵明がその二人に仕えたとしても、咎められるような不名誉なことではないと思う。なぜなら、淵明が仕えた時には、二人とも、晋朝の「忠臣」として、「北伐」したりして、大活躍したのだ。「篡奪」と「動乱」の変転きわまりない当時であって、二人の真面目を見破ることは容易なことではなかった。まして、淵明自身が晋朝の「忠臣」なのかどうかは、未だ疑問なのだ。当時としては、「猛志」（「経世済民」）（『雜詩』第五首）を抱いて東西遊官した淵明は、自分の抱負を実現させるために、こういう成長株に仕えるのは当然で、むしろ仕えないほうがおかしいと言いたくなるくらいである。右と同じ道理で、異変を感じた淵明が鞍替えをするのも、ある意味では必然的な行為であり、それを岡村氏が功利主義だと批判するのはあまりに今日的な価値基準に拠りすぎてはいまいか。

②帰りにんいざ

隠遁の動機については、義熙元年（紀元四〇五）十一月、淵明四十一歳の年に作った詩「帰去来兮の辞」の「序」に自ら触れたことがある。

「尋いで程氏妹、武昌に喪る。情は駿奔に在り、自ら免じて職を去る」と。

沈約の『宋書隱逸伝』以下の陶淵明伝では、その隠遁のきっかけは妹の死にありとせず、郡から派遣された監督官に対しての反発によるとなっている。

淵明が彭沢県令の職について、わずか八十何日かでそれをなげうった。上級官庁から派遣された督郵が、巡視にやって来、属僚たちは淵明に衣冠束帯して、出迎えるようすすめた。淵明は嘆息して言った。

——「我、五斗米のために腰を折りて、郷里の小人に向うこと能わず」という言葉をのこして辞職した。

岡村氏はこれらの説を直接の動機として位置づけて、また、潜在的要因を次のいくつかにとめた。

その第一は、彼の社会生活における協調性の欠如である。

その第二は、自分の家での気ままな生活への強い郷愁である。

その第三は、具体的にどのような危険が淵明の身邊に予測されたのか、彼は一向にその実態を語ろうとしないけれども、とにかく何か彼の身邊に迫って来そうな危険からの脱出を、彼が真剣に考えていたらしいことである。

その第四は、動乱下における自分の田畑への小地主らしい懸念である。

岡村氏は、さらに以上の四項を、第一と第二をひとつにしぼって、「彼の自主性の強さ、言い換えれば彼のわがままな性格に帰着する」といい、また、第三と第四は、「彼の自己保存に対する敏感さを物語る」と言った。

「自我をあくまで押し通すという頑固な性格と、自己保存のための鋭敏な感覚とは、ともに利己主義者の最大の特徴であり、その利己主義こそは、前にも私が述べたように、彼の超俗的な隠逸生活を根底において支える悪魔的な心理基盤であったのである。」³⁵⁾

筆者の疑問点

「性は剛にして才は拙なれば、物と忤うこと多し。自ら量りて己の為にすれば、必ず俗患を貽さん」。(『子の儼等に与うる疏』)

岡村氏はこの詩から淵明の「社会生活における協調性の欠如」というものを読み取ったが、筆者は、それには納得しかねる。

確かに、これは淵明の本音かもしれないし、ある程度、事実かもしれない。しかし、淵明の生きていた乱世を念頭において考えると、それをそのまま真剣に信じるのも、どうかと思われる。その危険については、彼はこう記した。

「密かき網の裁られて魚駭き、宏き羅の制られて鳥驚く、彼の達人の善く覚り、乃ち禄を逃れて帰耕せり」(『士の不遇に感ずる賦』)

「但だ恨むらくは謬誤多からん、君よ、当に酔人を恕すべし。」(『酒を飲む』其の二十)

筆者は、ここでの「拙」と「酔人」を淵明の保身のためのカムフラージュと理解している。まず、「拙」について、考察を加えよう。

まず、「拙」は「朴」と同じで、道家の「無為自然」の道を意味している。

もう一つ、権力者に非協力的な人は要注意人物になるので、権力者のやることが気に入らないというより、自分には能力がないといって、用命を断ったほうが無難だろう。

そして、「少きときより俗に適う韻無く」(『園田の居に帰る』其の一)と「性は剛にして才は拙なれば、物と忤うこと多し」(『子の儼等に与うる疏』)から窺えるように、淵明は世渡りの下手な人である。私は、淵明のこういうところを「参謀として軍務に無能であった」³⁶⁾、「事務に堪能ではなかった」³⁷⁾、「社会生活における協調性の欠如」³⁸⁾と批判するよりは、俗に相容れないと解釈したほうが妥当だと思う。

次に、「口は災いの元」という諺があるように、特に淵明が生きていた乱世では、常に自分の言論に注意を払わねばならないのである。何か不都合な場合、「酒の場では無礼講」に似たような、こういう言い逃れが効くかもしれない。そのいい例に、「竹林の七賢」の一人、阮籍も、当時の権力者、司馬昭がわが子炎と姻戚関係を結ばせようとしたが、籍はそれを断わるために、酒に酔っ払って六十日間に及び、昭はついに言い出す機会がなかったという。

以上の分析の如く、彼の隠遁も理由ははっきりしないが、上の『士の不遇に感ずる賦』の示すように、ある種の危険を察知して、そこから脱出しようとした行動ではないかと思う。

③隠逸の生活

淵明は四十一歳の時に、郷里に隠棲した。以後六十三歳で世を去るまで、ずっと晴耕雨読的な超俗的な生活をしていたと言われる。

岡村氏は、淵明のこの間の生活を、「南村移居」、「怨詩、楚調」、「飢餓と清貧」、「有力なパトロン必要性」と、四つの部分に分けて論述した。

まず、淵明の南村移居の動機について、江州刺史の王弘らの官僚や知識人たちに接近することが目的だと説き、また、『怨詩、楚調』、『会ること有りて作る』、『食を乞う』といった淵明

の詩を根拠に、「彼は悲痛なねだりの詩をもって、そうした清貧生活を続けるための生活物資の救援を、友人官僚に懇請したのであった。」³⁹⁾という見解を示し、淵明の「卑屈な態度」⁴⁰⁾と「生活物資をねだったこと」に、「彼の縁故依存、ないしは権力依存の意地ぎたなさをみ」⁴¹⁾ていく。

また、淵明は、長官の王弘をパトロンとして接近し、彼から、物質的な援助を受けたという。よって、淵明が、「自らも自負し、世間からも賞賛されるような清廉無欲な隠者では決してなかったことも、また疑いのない事実として認めないわけにはいかないであろう」⁴²⁾という結論を打ち出していくのである。

ここでは、筆者は、三つの疑問を持っている。

その一、『食を乞う』

「飢え来って我を駆り去るも、知らず 竟に何くに之くかを。行き行きて斯の里に至り、門を叩けども 言辞拙し。主人 余が意を解し、遺贈あり 豈に来るを虚しくせんや……」

この詩は、自分を乞食にたとえ、仕官運動をした時のことを暗喩したものであると、後世の批評家の間では、仮託の詩、シンボリックの詩とする説も出ている。

その二、「君子固窮」

斯波六郎氏の言葉を借りておこう。

「「固窮」をば、「困窮を固く守る」または「困窮にも固く守る」という意味に、淵明は使ったものと今は見るのであるが、そのいずれにしても、詳しく言えば、困窮に屈しないで、自分の信念なり主義なりを守り続けることである。これを逆に言えば、困窮に堪えられないで信念なり主義なりを曲げてしまうということをしないのである。淵明における困窮は、おおむね貧窮を意味するが、主義信念を捨てて世渡りをうまくやることによって、その貧窮は恐らくきりぬけられたであろう。しかしそれをしないのが「固窮」である」⁴³⁾。

その三、梁の蕭統の『陶淵明の伝』に王弘と同じく江州刺史となっていた檀道濟の援助に対して、彼は、厳しい態度でこれを拒絶している。なぜ淵明は、一方の王弘には好意的に接近し、他方の檀道濟には冷淡な態度をとったのか。

岡村氏は、「他力依存」、「縁故依存」だと、淵明をとらえたが、筆者は淵明の二人に対する違う接し方に淵明の交友態度が示されていて、それ以上のものではないと思う。さもないと、同じ「他力依存」だから、檀道濟に「依存」してもいいのではないか。

筆者は、『怨詩、楚調』、『会ること有りて作る』、『食を乞う』といった淵明の詩を、淵明の実生活の描出だと思わない。淵明の詩作の中に、このような創作の時期もはっきりしないし、その真の意図もいま一つ掴めないものが数少なくはない。そして、「親老い家貧しく」のような表現は、クラシカル・アリュージョンを伴う一種の成語であって、「任重くして道遠ければ、地を扱ばずして息い、家貧しくして親老いたれば、官を扱ばずして仕う」（『孔子家語』致思篇）という古い言葉をふまえている。こういった詩文を彼の実生活と強引に結びつけようとするよりは、一海知義氏の言うように、寓意に満ちた「虚構」だと理解すべきではないかと思う。

3-2-2 解釈者の地平——岡村繁氏への解読

岡村氏がその著書『陶淵明——世俗と超俗』の「あとがき」で、大学時代から、「従来の淵明研究の一般的動向に対して不満を持ち」、当時の師の斯波氏の「淵明観」に対しても、「何か飽き足りない、反逆的な疑問を抱き始めた」と言った。これは氏の後ほどの著書『陶淵明——世俗と超俗』の「批判的」視点の出発点だと言えよう。

岡村氏はこの著書において、始終この批判の立場を貫いた。

以下、解釈者としての岡村氏について、分析してみたいと思う。

①二項対立から一極へ

氏は「世俗」と「超俗」を対極の概念として用い、「二項対立」の方法で淵明をとらえた。方法としてはかなり有効なようだった。淵明の「矛盾」が浮き彫りになって、新しい淵明像がくっきりと現れてきた。

ここで、岡村氏の淵明へのマイナス評価の一部を見てみよう。

「背信の論理」、「事務には堪能ではなかった」、「軍務にはほとんど無能であった」、「卑劣な背信行為」、「冷徹非情な自己中心主義」、「無節操の極み」、「際立って目につく露骨でいやらしい行動」、「無節操で無原則な再三にわたる転身ぶり」、「悪魔的モラル」、「利己主義者」、「無能で怠惰な幕僚」⁴⁴⁾等々。

これを見ていると、淵明が「卑俗」だということを納得するしかないようだ。しかし、筆者は、氏の論説にある種の無理を感じ、なかなか、納得がいかない。

いろいろ分析した結果、岡村氏の自家撞着を次の二点にまとめることが出来た。

まず、岡村氏の論理の展開を検討してみると、「世俗」と「超俗」の「二項対立」が、いつの間にか、「二者択一」に変質してしまったのに気が付いた。岡村氏が従来の淵明を「超俗」的に美化する傾向に強い批判の意を表明した。にもかかわらず、今度は、逆に、「超俗」という概念を絶対化し、それを基準として淵明に当てはめようとした。岡村氏が淵明の「矛盾」を突破口にして、淵明の生涯を悉く否定的な方向へと解釈した。ここまで来ると、淵明が卑俗的だという結論は、ほぼ必然的だ。

次に、「無能で怠惰な幕僚」だの、「利己主義者」だの、「社会生活における協調性の欠如」だの、「家庭に対する彼の無責任」だの、といったような、岡村氏の淵明に対する否定的な評価を、逆発想的に考えると、不思議なことに、前述の「超俗」の基準とは反対に、岡村氏の淵明を見る目は、世間一般の価値観に基づくもの、いわば社会通念だと言ったことが見えてきた。淵明の生き方を見ても分かるように、世間一般が価値ありとするプラスの方向とは逆に、彼は、自分の信念を持っていて、それを貫くために、自分一個の心に忠実に従う独自の道を歩んだ。それは、つまり隠遁というマイナスの方向だ。筆者は、淵明に「矛盾」があることを分かりつつも、「悠悠自適」を求めつづけた彼の姿に魅了された。

その他、岡村氏の「淵明観」には、日本の宗教的求道者としての隠者のイメージによる部分が著しく現されていることを指摘しなければならないと思う。

確かに、淵明が「超俗」だと言うのは無理かもしれない。しかし、常人以下の卑俗まで言われるのは、これもまた極端過ぎるのではないかと、疑念を禁じえない。

②「誤読」と「過度の解釈」について

岡村氏は、「没主観的眼光」⁴⁵⁾、「淵明の詩文を中心にしながら、彼の生涯における生き方とその人生観とについて、できるだけ客観的に私なりの検討を加えてきた。」⁴⁶⁾とのように、「客観性」を貫く姿勢を示したけれど、氏の著書を読んでいると、どうも「客観的」だとは思えない。氏が「批判」という観点から、ところどころ、意識的、または無意識的に「誤読」と「過度の解釈」を施した気がしてならない。

紙幅のため、そうした例をいくつか挙げて簡単に分析するだけで留まりたい。

A. 「ああ皇いなる仁しき考は、淡焉として虚止しく、跡を風雲に寄せ、茲が愠りと喜びを
わす
真る」(『子に命づく』の詩)

といわれるような隠者的な父の家庭教育における甘さや無関心さは、彼のわがままな性格を形成し、助長するのに絶好の条件を提供したものと考えてよいであろう⁴⁷⁾。

この「淡焉として虚止しく、跡を風雲に寄せ」は、超然とした父の功名心のないことを言っていて、普通、無名の父のための弁解と受け止めるが、「父の家庭教育における甘さや無関心さ」という解釈はどうかと思われる。

B. 「衣を払って田里に帰りぬ」(『飲酒』第十九首)

この「淵明の手前勝手な去就」から、「家庭に対する彼の無責任」な態度が窺われる⁴⁸⁾。

「自らを社会から遮断し、個人だけの「自由」を極度に憧憬する隠遁の生活は、つきつめていえば、他人の迷惑も家族の犠牲をも顧みない、冷徹非情な「利己主義」の生活規範なくしては、とうてい貫き通すことの出来ない本質的性格を持つものである」⁴⁹⁾。

淵明は「世捨て人」ではない。彼には家族がある。官界から離れた田園生活は、彼の理想であった。一家の生計は現実問題だが、彼の行動を左右したのは、むしろ、もっと根本的な信念のほうだと思う。

「淵明においての困窮は、おおむね貧窮を意味するが、主義信念を捨てて世渡りをうまくやることによって、その貧窮は恐らくきりぬけられたであろう。しかしそれをしないのが「固窮」である」⁵⁰⁾

私は、斯波氏のこの見解に大いに共感を持った。

筆者が思うに、もし、淵明が「家庭に対する責任」を全うすることだけを考えて、役人として、あるいは農夫として、まじめに働くのだったら、歴史に埋もれた無数の平凡な役人、優しい父親が、一人増えるかもしれない。しかし、おそらく、後世の人々の憧れる偉大な詩人、いろいろと解釈される陶淵明は、存在しないだろう。

C. 「「通衢に憩わん」(官僚としてのんびりやろう)(『始めて鎮軍参軍と作りて、曲阿を経しときに作る』)という言葉が、もし彼の本当の心境であったとしたならば、それは、もはや「経世済民」などとは全く無縁のものであるばかりか、怠惰な禄盗人の根性であり、そうした

のびやかな官僚生活は正に隠逸生活の恵まれた延長でしかない」⁵¹⁾。

「通衢に憩わん」という表現は、功名心がない、「朝隠」を匂わせている。「官僚としてのんびりやろう」というふうに理解されるのはそれなりに背けるとして、「怠惰な禄盗人の根性」には、到底、至らないだろう。

D.『帰去来の辞』の序文によれば、彼が県知事を辞任した直接の動機は愛する妹の葬儀に駆けつけたい一心からの決断だが、『帰去来の辞』の本文では、妹の死去に対する悲しみの感情など微塵も見当たらない⁵²⁾。これは「亡妹に対する彼の手前勝手な非情さ」を、「露骨に物語」っている⁵³⁾。

確かに、淵明の辞任は、吉川幸次郎氏の『陶淵明伝』の言うように、「妹の死のためにというのは、言葉をはぐらかしたのであった」かもしれない。淵明も「すぐ妹の葬儀に駆けつけなかった」⁵⁴⁾かもしれない。また、『程氏の妹を祭る文』も、妹の死後すぐ書いたものではないかもしれない。どういう事情でそうなったかは知らないが、その点を明らかにしないままに、これらのことを根拠に、「亡妹に対する彼の手前勝手な非情さ」を、「露骨に物語」っていると、果たして言えるのかと、筆者は疑問に思う。

E.「退官は一稔^{ひとみのり}してから以後に」(『帰去来の辞』の序)、「わずか三ヶ月足らずの怠惰な勤務でありながら、その役得だけは一カ年分ごっそり持って帰るという、彼はなんと厚かましい功利主義者であったとことか」⁵⁵⁾。

岡村氏は、淵明が「公田の利」(『帰去来の辞』の序)を狙って、県知事になったと見ている。それは、一理がある。淵明自身もそう言っている。しかし、「厚かましい功利主義者であった」のような、あまりの拡大解釈は、妥当ではないと思う。もし、淵明がそのような汚い人であったら、「自ら免じて職を去った」(『帰去来の辞』の序)ということはないだろう。辞任しないで、我慢すれば、「一稔」だけではなくて、「公田の利」をずっと獲得することができるだろう。

F.「淵明の仕官当時に作った詩を通覧してみると、そこには、たがいにが、微妙な、あるいは強引な結びつき方で共存していることを認めないわけにはいかない。その一つは、彼の仕官に対する積極的な心情であって、……他の一つは、田園での自由な隠逸生活に対する強い憧憬であって、この志向は、いうまでもなく彼の詩全般を一応支配しているものである」⁵⁶⁾

「彼の強調する「真」や「固窮の節」は、みずからの生活に対する一種の美化表現であり、また、みずからの世俗的野心の屈折した変形でもあったと考えてよいのではあるまいか。」⁵⁷⁾

この点に関しては、筆者は、こう思っている。

「遙遙と羈の役に従い、一心 両端に処る」(『雑詩』の第九首)

淵明は、まさに、この詩の告白の如く、仕官と隠遁の間を行きつ戻りつする心の苦悩、葛藤に、いつも苛まれていた。

そして、「真」と「固窮の節」だが、これも、また、それぞれ道教と儒教の代表的理念である。「真」と「固窮の節」は、「背反しあう二つの志向」、いわば、仕官と隠遁と同じように、「美化表現」というより、淵明の心的矛盾を端的に物語っていて、儒家と道家の「両端」の表われともいえよう。

4 二項対立を超えて

以上述べてきたように、淵明研究者たちは、それぞれ、淵明の一端を握ったが、しかし、その全体像が一向に見えてこない。それを解明するには、部分的ではなくて、もっと多角的、包括的な捉え方が必要だと思う。ここで、自分の見識が狭いことを顧みず、挑戦してみたいと思う。

4-1 儒家に非ず道家にも非ず

まず、陶淵明の思想の系譜を辿ってみよう。

淵明の青春時代に受けた教育が、儒家のそれであったことは明らかである。儒家思想が彼に多大な影響を与えた痕跡を彼の詩文の中から見つけよう。

「少年より人事罕にして、遊好は六経に在り、行き行きて不惑に向んとし、淹留して 遂に成るなし」(「飲酒」その十六)——このように彼は告白している。

また、「総角にして道を聞くも、白首にして成るなし」(「榮木」の序文)と書いている。ここでの「道」は、明らかに儒家の道を指している。

「先師 遺訓あり、道を憂えて貧を憂えざれ、と」——「癸卯の歳始春、田舎に懷古す」

「談諧いて俗調なく、説くところは聖人の篇なり」——「彪参軍に答う」

「上天の成命を奉じ、聖人の遺書を師とす」——「士の不遇を悲しむ賦」

「斯濫はあに志すところならんや、固窮は夙に帰するところなり」——「会ること有りて作る」

また、「ただ親旧のための故に、未だ肯て索居を言わず」(「劉柴桑に和す」)のように、陶淵明が家族や親子の絆を重んじるのも、まさに儒家の倫理思想の影響であろう。

もう一方、陶淵明は「老莊を尚ぶ」時代に育った人物であったから、彼の思想には、道家的要素が混じらないわけにはいかなかった。それがはっきりと示されているのは、社会理想と死生観に関する面である。

まず彼の社会理想について述べよう。「秋の熟りに王の税^な靡し」(『桃花源詩』)、彼のそういう理想とした「桃花源」は、『老子』の「小国寡民」から影響を受けたことは一目瞭然である。

また、死生観においても、老莊思想の影響は著しい。

「大化の中に縦浪し、喜ばずまた懼れず」——「形影神」

「人生は幻化に似たり、終にまさに空無に帰すべし」——「園田の居に帰る」

このように、淵明の思想は複雑であった。儒教は彼の思想の根底になっていて、その上に、老莊思想が加わってきた。一方では、「猛き志は四海に逸せ、^は翮^{つばさ}を^あ翥^あげて遠く^は翥^はせんことを思う」(『雜詩』)という功名を求める心意気をもったこともあった。もう一方では、「静かに園林の^よ好きを^{じんかんまこと}念い、人間 良に辞す可し」(『庚子の歳五月中、都より還るに、風に規林に阻まる』其

の二)、「誤って塵網の中に落ち、一たび去って三十年」、「久しく樊籠^{はんろう}の裏にありしが、復た自然に返るを得たり」(『園田の居に帰る』其の一)から、老莊の「無為自然」は深い影響が見られる。ここの「人間^{じんかん}」、「塵網」、「樊籠^{はんろう}」は、むろん役人生活を指す。

隠遁した後の「日月は人を捨てて去り、志あるも騁ばすを獲ず、此れを念えば悲凄を懷き、暁に終るまで静かなる能わず」(『雜詩十二首』第二首)という感慨無量の詩も、彼が仕官と隠遁にずっと悩まされていたことの証明だろう。

以上考察してきたように、陶淵明は儒家思想と道家思想とを併せ持っている。彼の基本的教養は儒家であるが、老莊の思想の吸収を通じて儒家を次第に道家化していった。彼は、儒家を尊崇し、かつ道家を排斥せず、のちに両者を一つに結びつけたが、これこそ彼自身の独特な思想のあり方を形成したものである⁵⁸⁾。従って、淵明を儒家だと限定するのはもとより、また、道家だと断定するのも正確だとはいえない。

4-2 「世俗」と「超俗」のあいだに

日本人にとっての隠遁とは俗塵から解放された世捨て人の生活を想像させるが、「王侯に事えず、其の事を高尚にす」(『易』「蠱卦上九」)に示されたように、「隠遁」が、絶えず「仕官」を意識しつつ行われることは、中国の隠遁思想の特色である。

陶淵明の隠逸の場合は、以上の政治的特色を有しながら、さらに言えるのは、人倫とのかかわりである。彼の隠遁は、政治からの逸脱であっても、人倫からの逸脱は無い。彼の隠棲した「田園」は、「山林」ではなく、「官界」でもない。それは、「中間的」で、「両義的」な世界であった。彼の詩文を見ても、同じことが言える。彼の『桃花源記』での「桃源郷」は、「仙境」でもなく、実際の動乱中の「田園」でもない。いわゆる「中間的」で、「両義的」な世界であった⁵⁹⁾。つまり、陶淵明は「世俗」(「仕官」)でもなく、「超俗」(「隠遁」)でもないところ、すなわち「世俗」と「超俗」のあいだにおいて自足しようとするのである。

いわば、「廬を結んで人境にあり而れども車馬の喧無し」のように、人里であってもかまわない。「心遠ければ地自ら偏なり」と言われる如く、心が俗世間から離れているならば、どこであってもよいのである。隠逸は現実には俗世間を離脱するというよりも、むしろ精神的に超越するということを第一義とするのである。

換言すれば、陶淵明は、「世俗」と「超俗」という二項対立の図式の枠外に位置しているのだ。「超俗」とは、「世俗」から^{のが}「遁」れることを意味している。すなわち「超俗」は「非世俗」でしかないのである。そのような意味では、「超俗」と「世俗」はおなじレベルの二項対立でしかないのである。しかし、陶淵明は、そのような二項対立そのものから飛び出て、「非仕官」の状態、かつ「非隠遁」の立場に立っているのだ。いわゆる「俗中に俗を越える」のだ。これでは、二項対立がもはや当てはまらないと思う。

以上述べてきたように、要するに、淵明を全体的に把握するには、「儒」と「道」、または、「超

俗」と「世俗」のような二項対立的な思考方式を超克しなければならないと思う。

結びに代えて

陶淵明は多面体の詩人である。

「横に看れば嶺を成し ^{かたわら} 側には峰を成す、遠近高低 各 不同なり、廬山の真面目を識らざるは、只だ身の此の山中に在るに縁る」(北宋・蘇東坡「西林の壁に題す」)

これは、廬山の山容を詠じた詩である。視点の相違に応じて、異なる姿を現す廬山、それを見る自分が山中に身を置いているから、その真の姿が分からないのだという。

陶淵明は、まさに、この詩の言うように、いろいろと解釈されてきたが、その実像は依然として霧の中。筆者は、本稿で、述べてきたように、岡村氏の「淵明観」に納得しかねるところがたくさんあるが、氏の前人未踏の見解に大いに関心を持ち、氏から得た示唆が実に大きい。拙論は正しく氏の説をめぐって展開しているのだ。いままでの淵明研究を見ていると、中国の学者が淵明の思想的傾向を究明することに重点を置くのに対して、日本の学者がもっと人間としての淵明の矛盾に注目しているという相違が顕著に見られる。私が思うに、淵明研究の新たな進展を図るには、日本の学者の異なった視点の取り入れ、いわゆる「方法としての日本」、または間主体性が必要ではないかと思われる。

最後に、淵明に対する私の見方といえ、淵明は神様ではない。彼には、普通の人間に備わる喜怒哀楽、すべてある。彼はもとより、超俗的な存在ではない。だからといって、俗物でも決してない。清の時代の鐘秀という学者が、淵明を「俗に儕かず、亦、俗から ^{はな} 絶れず」⁶⁰⁾と論じた。それは、当を得た評価ではないかと思う。

よく、「文は人なり」という。文章というものはその人の人柄がはっきり出るということを指しているのである。淵明の詩文は彼を伝えている。そのことは疑えない。淵明の文筆に、彼の人格が、まったくなかったということは、はたして、ありうるのだろうか。私は淵明の「矛盾」、いわば、彼の人間臭さが彼の魅力的なところではないかと思う。淵明と淵明の遺した詩文は、今まで、人々に、特に知識人に、大きな影響を与えてきた。おそらく、これからも、人々に影響を与え続けながら、解釈されていくだろう。

参考文献

- 岡村繁 (1974)『陶淵明——世俗と超俗』日本放送出版協会
吉川幸次郎 (1958)『陶淵明伝』新潮社
鈴木虎雄 (1991)『陶淵明詩解』平凡社
一海知義 (1997)『陶淵明——虚構の詩人』岩波書店
松枝茂夫、和田武司 (1990)『陶淵明全集』岩波書店
斯波六郎 (1990)『中国文学における孤独感』岩波書店
小尾郊一 (1988)『中国の隠遁思想——陶淵明の心の軌跡』中央公論社
和田武司 (2000)『陶淵明伝論』朝日新聞社
中谷孝雄 (1974)『わが陶淵明』筑摩書房
沼口 勝 (2001)『桃花源記の謎を解く』日本放送出版協会

田部井文雄（2004）『陶淵明のことば』斯文会
 林田慎之助博士古稀記念論集編集委員会（2002）『中国読書人の政治と文学』創文社
 曹明綱標点（1998）『陶淵明全集』中国・上海古籍出版社
 張芝（李長之）（1953）『陶淵明伝略』中国・棠棣出版社
 李文初（1986）『陶淵明論略』中国・広東人民出版社
 魏正申（1996）『陶淵明評伝』中国・文津出版社
 朱光潜（1984）『詩論』中国・三聯書店
 木斎、張愛東、郭淑雲（2001）『中国古代詩人的仕隠情結』中国・京華出版社

注

- 1) 鈴木虎雄『陶淵明詩解』「例言」
- 2) 一海知義『陶淵明』の「あとがき」
- 3) 岡村繁『陶淵明——世俗と超俗』p55-56
- 4) 魯迅「題未定」草（六）（『且介亭雜文二集』）
- 5) 朱光潜『詩論』の「第十三章、陶淵明」をご参照。
- 6) 岡村繁『陶淵明——世俗と超俗』p62
- 7) 斯波六郎『中国文学における孤独感』p165
- 8) 岡村繁『陶淵明——世俗と超俗』p62
- 9) 吉川幸次郎『陶淵明伝』p152-153
- 10) 同上 p79
- 11) 同上 p80
- 12) 同上 p35
- 13) 一海知義『陶淵明』p204
- 14) 同上 p132
- 15) 同上 p207
- 16) 同上 p212
- 17) 岡村繁『陶淵明——世俗と超俗』p58
- 18) 同上 p234
- 19) 斯波六郎『中国文学における孤独感』p189
- 20) 同上 p180-181。ここで、斯波氏は淵明が「寂しさ」と「悩み」を超越した諦観する境地に達したと言っている。しかし、斯波氏の著書を読んでいると、結局のところ、氏が淵明の「矛盾」を説いたと筆者は見ている。
- 21) 吉川幸次郎『陶淵明伝』p24
- 22) 同上 p35
- 23) 一海知義『陶淵明』p131-133
- 24) 同上 p176
- 25) 同上 p131-133
- 26) 同上 p 6
- 27) 岡村繁『陶淵明——世俗と超俗』p226
- 28) 同上 p224
- 29) 同上 p226
- 30) 同上 p63
- 31) 同上 p96
- 32) 同上 p124
- 33) 同上 p124
- 34) 同上 p135

- 35) 同上 p162
- 36) 同上 P121
- 37) 同上 P120
- 38) 同上 P149
- 39) 同上 p182
- 40) 同上 p172
- 41) 同上 p183
- 42) 同上 p190
- 43) 斯波六郎『中国文学における孤独感』 p189
- 44) 岡村繁『陶淵明——世俗と超俗』 p116、p120、p121、p122、p122、p123、p124、p124、p135、p162、p215
- 45) 同上 p227
- 46) 同上 p211
- 47) 同上 p212
- 48) 同上 p100
- 49) 同上 p122
- 50) 斯波六郎『中国文学における孤独感』 p189
- 51) 岡村繁『陶淵明——世俗と超俗』 p113
- 52) 同上 p142
- 53) 同上 p148
- 54) 吉川幸次郎『陶淵明伝』 p121
- 55) 岡村繁『陶淵明——世俗と超俗』 p148-149
- 56) 同上 P112
- 57) 同上 p210
- 58) 李長之「陶淵明の思想的態度について」 p302-324
- 59) 門脇広文「陶淵明＜桃花源記＞小考」(『中国読書人の政治と文学』所収)
- 60) 『陶靖節記事詩品』中華書局1962年1月、p244をご参照。

(原稿受理 2005年12月7日)